

文明哲学研究所「ART meets SCIENCE」の開催にあたって

2017年3月8日(水)

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

ART meets SCIENCE の第1回の企画です。「茶道 meets 建築」という題です。ゲストは、茶道家で芳心会主宰の木村宗慎さんと建築家で京都造形芸術大学大学院教授の岸和郎さんです。本日のコーディネーターは、齋藤亜矢さんで、芸術認知科学を専門とする京都造形芸術大学文明哲学研究所准教授です。

今日の企画にあたっては、京都造形芸術大学のキャンパスの中で、千秋堂という建物の会議室が選ばれました。1階には裏千家のデザインによる茶室があり、先ほど木村宗慎さんのお点前を岸先生が愉しまれたところです。

文明哲学研究所では、『芸術とは何か』から『人間とは何か』を考える」をテーマに、多角的な視点から「芸術とは何か」を考え、対話する試みをはじめます、と今日の企画の趣旨にあります。さまざまな分野のアーティストと、さまざまな分野の研究者を招いて講演と対談の形式で研究会を実施します。

私は学長として、この研究所の設立にあたり、人類を含む地球社会の共生を実現する目標を置いて、東洋の思想、吾唯知足の考えを出発点に置きながらさまざまなことを考えてきました。日本はさまざまな課題の先進国であり、それを解決して後発国に渡すという使命があると思っています。設立者の徳山詳直による原点は、物理的な武器を持たず、良心を武器としてそれに向かうというものでありました。

初代の井原所長の後を継いで、私は所長代理をしばらくつとめました。設立の理念である創設者徳山詳直の「京都文藝復興」をもとに運営を行いました。人間は自らの誤りに気づきはじめた。果たして人間とは何か、という問いに、さらに生きるとは何か、生命とは何か、それらを大きく育む宇宙とは何かという問いに答えるため、私は東洋の思想と叡智を基調とすること、人間精神復興の壮大なる実験と冒険に挑む勇気、芸術文化探求への絶えることなき研鑽が人類を希望ある未来へと導くことを信じて研究所の仕事を進めるということにいたしました。

「芸術立国之碑」には「宇宙の神秘に平伏せ、地球の偉大さに畏れを抱け、生きとし生きる命を愛し尊べ」とあります。それをもとに、大学全体を視野においた教育、研究、社会貢献を旨とする研究所として、「芸術と平和」「人間とは何か」を当面の課題の基本としました。科学、技術、学術、芸術の視点を同じように保ちながら、西洋流の科学の主流である分析的、還元的な方法だけでなく、統合的、包括的手法を取り入れることに重きを置いてきました。

その中で、もっとも重要な仕事は所長をどなたにお願いするかということであり、その結論が現在の所長である松沢哲郎先生をお迎えすることでありました。松沢先生は所長就任のご挨拶の中で、力を尽くす所存と言われ、本学の建学理念である『芸術立国』の考えを理解してくださって、小さな研究所であるが託された思いは大きいと、自由・平等・博

愛という人類が共有する理念を実体化することだという思いを述べられています。その理念のもと、この世界の森羅万象に優しいまなざしを向けられる若者を育てるのが使命だとも言われました。

私は学長として、新年度の4月からさらに2年の任期をいただいておりますが、その所信表明の中で、研究では、人間とはなにか、芸術とはなにか、芸術はいかに平和に貢献するかを課題とすると申し上げ、そのためには文明哲学研究所の活動を活性化しながら、着実な進展を目標としますと宣言しました。哲学的思考の前に、自然科学的研究の進展を図り、先端の研究成果を取り込むことが重要と考え、それを実行しながら、そこから得られた知的財産を教育と社会貢献に活用します。人類が芸術の能力を獲得したのは、地球の歴史のつい最近で、10万年前にはまだ確立していなかった能力とされています。まず、そのことを研究しつつ人間とはなにかを考えますと言いました。

このような立場で、今日、新しい研究会のシリーズに参加しておりますが、今日のお2人の講演と議論とが、どのように展開されるか、本当に愉しみにしております。ご参加の皆さまを大いに思いをめぐらせていただきながら、芸術と科学、学術と文化への参画を試みていただきたいと思います。

今日は、たくさんのご出席、ありがとうございます。